

## 翻訳にあたってのヒント

### その 21

#### 敬語について

先週の新聞に、敬語が 3 分類から 5 分類にされ、「美化語」が新設され、「謙譲語」が二つに分割されると報じられていた。それによれば、敬語の指針づくりに取り組む文部科学省（Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology）の「文化審議会国語分科会」の「敬語小委員会」が、現在は一般に「尊敬・謙譲・丁寧の三つに分類されている敬語」を五つに分類する指針案をまとめ、一般からの意見も採り入れながら修正し、来年（2007 年）2 月までに文部科学相に答申するという。

以下は、こちらで多少加筆したその内容である。

※ 尊敬語（相手を高める ; honorific language）： 敬語の一つ。聞き手や話題の主、またその動作、状態、所有などを高めて話し手の尊敬の気持ちを表す語。

[例]：お（ご）～になる（～なさる・～です・～くださる）。 / お（ご）～の〇〇。 / ～なさる。 / ～れる・られる。 / いらっしゃる / ご利用になる / おっしゃる / お使いになる / お忙しい / 召し上がる / ご住所 / ご立派 / はじめられる / (相手からの) お手紙、ご説明 / 読まれる 等。

※ 謙譲語（自分を低める ; humble language）： 敬語の一つ。話し手自身を卑下して表現することにより、相対的に相手や話中の人に敬意を表す語。「いただく」「いたす」「まいる」など。謙遜語。敬譲語。

[例]：お（ご）～する（～いたす・～申し上げる・～いただく、～をたまわる・差し上げる）等。

\* 謙譲語 I：自分がへりくだることで相手への敬意を表現する。

[例]：伺う / お届けする / 申し上げる / ご案内する / お目に掛かる / (相手に対する) お手紙、ご説明 / 差し上げる 等。

\* 謙譲語 II (丁寧語)：自分の動作などを丁寧に表現する。

[例]： 参る / おる / 申す / 小社 / いたす / 拙著 等。

※ 丁寧語（相手に対して丁寧に述べる ; polite language）： 敬語の一つ。尊敬語や謙譲語に対して、もっぱら聞き手、読み手を考慮して用いる敬語。話題の事物を美化したり、叙述に丁寧な気持ちを含めたりする表現。

[例]： 「お話・ご飯・～です・～ます・～でございます・～ください」などの類。

\* 丁寧語：相手に対して丁寧に述べる。

[例]： ～です / ～ございます / ～ます 等。

\* 美化語：物言いを丁寧に上品にする。

[例]： お酒 / お料理 等。

では英語にも敬語はあるのかと問われれば、ないとはいえ、英語の場合は丁寧さの度合いを出すのに長くする傾向があるようであり、その実例を以下にあげてみた。

[例 1] ありがとう。 Thanks. --> Thanks a lot. --> Thank you very much. --> Thank you very much indeed. --> Thank you very much; it is (was) very kind of you.

[例 2] (お) 名前は? What's your name? → May I have your name(, please)? → Could you tell me your name, please? → Do you mind my asking your name? → Would you mind my asking your name? → Would you mind if I asked your name?

(※ Would you mind ...? の形で聞かれた際に「応じられない場合」は Yes, I do mind. / I mind it very much. / I'm sorry I can't because... などを使い、「応じる場合」は No, I wouldn't mind. / Certainly not. / Of course not. / No, not at all. / Yes, certainly. / Sure(ly). などを使う。)

[例 3] そのドアを閉めて。 Close the door. → Please close the door. → Will you close the door? → Will you please close the door? → Won't you close the door?

(※ ただし、Won't you please close the door?は、度を越えた丁寧な表現とされ男性は使わないとされる。)

[例 4] "wonder"を使って控えめな気持ちを出し、相手の返事を待つような丁寧な表現：

その件についてお伝え願えますか。 I wonder if (whether) you could tell me about the matter. (= Could you tell me about the matter?) → I am wondering if (whether) you could tell me about the matter. → I wondered if (whether) you could tell me about the matter. → I was wondering if (whether) you could tell me about the matter.

(※ I wonder if ..., I am wondering if ..., I wondered if ..., I was wondering if ...の順に控えめな気持ちが増す。)

特に「仮定法過去」は、ありそうもなく無理なようなことだが、お願いできますかというニュアンスで依頼し、相手の心の不安を減らす用法である。こういった類の表現法は、circumlocution と言われ、日本語でいえば婉曲的な言い回しのことである。

婉曲的なニュアンスを話題にしたついでに、「好きではない」を表す表現にみられる違い

についても述べてみる。

※ 私は彼を好きではありません。

I hate him. (一番直接的で、「あいつはとんでもない奴だから嫌い」の含みがある。)

I dislike him. (like を部分的に打ち消して、「気に入らない」のニュアンス。)

I don't like him. (文全体を打ち消して、「あんまり好きじゃない」という間接的な感じ。)

とはいえ、英語圏では、子供が ”I hate him.” などという言い方をすると、親に ”Don't say that, David. You cannot hate anybody.” (ここで会話に名前を挟むのも、相手とお近づきの印という意味で英語の丁寧な一大表現である) とたしなめられるようで、日本語で「大嫌い！」なんて言い方をすれば言われた本人がひどくショックを受けるのと同様にあまり使ってはならない言葉である。

さらに、英語を母国語とする英米諸国では、幼少時代から”Thank you”, “Please”, “Excuse me” の三つを常日頃から TPO に応じて使うように徹底的にしつけられるということがあり、ここに英語のたしなみの基本があるような気がしてならない。そんな訳で、日本人がはじめて英語の勉強をする時に、最初に覚える言葉を ”This is a pen.” にしてきた日本の英語教育は本筋からはずれたものだといえ、あちらの慣習にならいこの三つの基本語から英語の勉強をはじめるのが妥当だといえよう。

また、日米の両社会の根底にある違いとして、アメリカでは正義が黒か白かの二元論（イエスカノーのどっちか）をとるが、一方の日本では白と黒の中間（イエスでもノーでもないグレー・ゾーン）に正義を見いだすような傾向もみられる。最初にイエスカノーかをはっきり述べその後で理由を述べる英語と違って、長々と前置きを述べてから最後に善処しますなんてことを口にして果てやるのか・やらないのかを濁わせる日本語は言語道断である。特に、直接的な利益の損得にかかわる国際ビジネスの商業文のやりとりで、こんなことをやられたらあっちの人はたまったもんじゃないだろう。英米人を相手にしたビジネス文では、いかなる情勢においても、climate はグレーな曇り空ではなく、いつも快晴であると見なして、へんに卑屈にならずはっきりと積極的に書いてもらいたいものである。

英語圏では、イエスカノーをはっきり言い、さらに真実を言わない人を”He has no respect.”と表現したりと、英語は相手を”respect (尊重)”する文化の言葉と言えるが、イエスでもノーでもないことが多すぎ「礼や恥」といった極端に言えば自分の体面を重んじる日本文化とは対極をなすものであるが、敬語を三つも（そして五つも）使い分ける日本人が本気で英語を勉強したら、少なくとも英語の敬語表現などわけないものであるかもしれない。

以上。